緒　　言

あまり個人的な感慨などを書くべき場所ではないと思いますが、学年歴が一巡りしたこの時期は一年を振り返って後悔やら徒労感やら、およそ芳しくないさまざまな思いが胸中を駆け巡るので、また紙面汚しに書かせていただきます。

18歳の春に故郷を離れて広島大学文学部に入学したのは39年前のことです。以来ずっと、立場は変われど、大学の中に身を置いてきました。それも、他大学に勤務した７年間を除く32年間、同じ大学の同じ学部を生活の場としてきました。右も左もわからぬ田舎者の一学生に学問への眼を開かせ育ててくれた大学で、遙かな後輩である若い学生たちを育てる身になれたことは、何という幸運かとつくづく思います。自分が心底面白いと思う学問の醍醐味を若い世代に伝えたい、そういう思いは年ごとに強くなります。定年まで残すところあと８年になってしまいましたが、その間、一人でも多くの学生たちに文学部で学ぶことの素晴らしさを実感してもらいたいと心から願っています。

私自身、学部の学生時代に、眼光鋭く、それでいて実に楽しげに学問を語る先生方の話に感化され、自分もこんなふうになりたいものだと思って研究の道に進みました。研究に没頭する先生方の姿は美しいと思い、憧れの対象でした。その頃の先生方の年齢を過ぎてしまった今、学生たちにそのような姿を見せることができているだろうかと思うと、はなはだ心もとない限りです。

90年代初頭のいわゆるバブル崩壊以後、日本経済は「失われた20年」と呼ばれる長期低迷期が続いているわけですが、それと時を同じくして、国立大学にも改革の嵐が吹き荒れ、しばらくも落ち着くことなく、ますます激しくなっています。旧来のままであることを罪悪であるかのごとく否定し、変わり続けることこそが21世紀を生き抜く大学のあるべき姿であるぞと次から次へと変革を迫る。改革の生ぬるい大学には予算はつけぬと言われるものだから、すわ存亡の危機、背に腹は替えられぬと、大学当局は学問の継承とか教育上の効果とかはそっちのけで、監督官庁に喜んでもらえそうな改革案作りにしのぎをけずり、現場には今のままでいられると思うなよと脅しをかける。そんな中で果たして私どもは若い学生たちに研究に没頭する美しい姿を見せて、憧れの対象となり得るでしょうか。

ノーベル賞を受けた教授が「寝食を忘れて研究しました」と研究に打ち込んでいた日々を振り返っていましたが、それも昔の話、今はおそらく会議や書類作りに追われる日々でしょう。文系・理系を問わず、学問研究にとって最も大事なのは、お金ではなく時間です。寝食を忘れて研究に没頭するふんだんな時間がなくては、いくら予算をつぎ込んでもノーベル賞級の研究成果はあがらないことはわかりきっています。なのにいつまでも、お金が欲しければ改革せよ、改革してお金を得たからには成果をあげてノーベル賞を取れと迫り続けるのは愚の骨頂としか言いようがありません。学者は誰も研究に没頭したいのです。それができる環境作りこそが監督する者の責務ではないでしょうか。

さて、本号は３編の投稿論文と連載２編の計５編で構成しました。研究などしていられる状況ではないと言わねばならぬ中で、貴重な時間をさいて御協力いただいた執筆者諸氏に感謝いたします。

平成27年３月

広島大学大学院文学研究科附属内海文化研究施設
施設長　妹　尾　好　信

目　　次

緒　言

広島藩の山林資源と山稼ぎの展開……中　山　富　広……　1

岩国市中央図書館所蔵和装図書目録稿(4)
　　―芸術、言語の部―……妹　尾　好　信……　19

山口県文書館蔵「近藤芳樹日記」翻刻（十）……久保田　啓　一……(31)

遠山荷塘年譜稿……樊　　可　人……(13)

上杉本『史記』の原本形態と渡来時期について
　　―厳島神社旧蔵本の可能性をめぐって―……陳　　狲……（1）

（　）は縦組で裏表紙から

広島大学大学院文学研究科附属内海文化研究施設研究紀要投稿・執筆要項

広島大学大学院文学研究科附属内海文化研究施設細則

広島大学大学院文学研究科附属内海文化研究施設運営委員および研究員（平成26年度）